

聞名仁教

第114号
(発行日)

2020年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

心は空よりも広い

《春季彼岸会》
三月二十二日(日)
午後二時始まり

私が大学時代、若き児玉
暁洋先生―当時里村保
一―が常勤講師として大谷
大学で教えておられて、そ
の講義の中で、「十九世紀の
フランスの文豪ビクトル・
ユーゴーが「海よりも広い
ものは空である。空よりも
広いものは心である」と言
った」と語られた。

この言葉は何か印象深か
ったので、その後ずっと頭
の中に残っていたのですが、
「海よりも空は広い」はよ
く分かるのですが、「空より
も広いものは心である」と
いう意味が分からず、けれ
ども何か意味深そうな言葉
だったので憶えていました。

今となってはこの言葉がよ
うやく「そうだなあ」と感
じられるのです。

このユーゴー(ユゴー)
の言葉はもともフレーズ
・パスカルの考えから来た

のではないかと思えます。
パスカルは十七世紀のフ
ランスの思想家であり数学
者・物理学者としても有名
です。中学の理科の時間に
パスカルの原理を習った記
憶があります。

とのなかにある。
私は多くの土地を所有し
たところで、優ることには
ならないだろう。空間によ
っては、宇宙は私をつつみ、
一つの点のようにのみこむ。
考えることによつて、私が
宇宙をつつむ。」「(『パンセ
ー』二四九頁・中公クラシ
ックス)

「人間はひとくきの葦あしにす
ぎない。自然のなかで最も
弱いものである。だが、そ
れは考える葦である。

と言っています。これは「人
間は一本の葦にすぎない。
しかし考える葦である」と
いう有名なフレーズで人口
に膾炙かいはされています。

彼をおしつぶすためには、
宇宙全体が武装するには及
ばない。蒸気や一滴の水で
も彼を殺すのに十分である。
だが、たとい宇宙が彼をお
しつぶしても、人間は彼を
殺すものより尊いだらう。

この言葉は非常に意味が
深いと思います。ここから
先ほどのユーゴーの言葉も
理解できるように思います。

なぜなら、彼は自分が死ぬ
ことと、宇宙の自分に対す
る優勢とを知っているから
である。宇宙はなにも知ら
ない。だから、われわれの
尊厳のすべては、考えるこ

パスカルはここで何を言
おうとしているのでしょうか。
それは、心は物質を超
えた広大な働きがあり、そ
れが人間の尊いところだと
いうのでしよう。

人間はそこらの川原に生
えている一本の草のような
もの。物質面から言うとな
当にそうです。(ただし、一
本の草も物質の働きとして
実に神秘的で不思議な存在
ですが)

パスカルは、人は一本の
葦のようなきわめてささや
かな存在であり、一滴の毒
水で死んでしまうようなか
弱い小さな存在である、し
かしながら「考える葦であ
る」というのです。

ここで「考える」という
のは、笑ったり怒ったりぼ
んやりするなどとは違って
「考える」というのではな
く、「考える葦」の「考える」
とは「知る」「働き全体を指
す言葉でありましょう。い
わゆる「認識する」「働き
ことです。

知るといふ働きはすごい
ことです。物質的には小さ
な葦のような存在ですが、

知るといふすごい働きをする存在、それが人間だと彼はいうのでしよう。

そこで「宇宙は人間をおしつぶすことができる。しかし人間は、それを知っている。宇宙はなにも知らない」と彼は言うのです。

宇宙という大自然と一本の葦にすぎない人間とは、比較にならないほど大自然は広大であり圧倒的です。けれども物質的自然は自分がどういふものであり、どういふ働きをしているのかをちつとも知らない。

たとえば月や太陽は一個の私と比べたら比べものにならないほど大きい。しかし月や太陽自身は自分がどういふ形をしているか、またどういふ働きをしているか、(何も知らない)。

人間はそれを知る事ができる。望遠鏡をのぞけばそれを知らることができる。望遠鏡をのぞいて月や太陽の形を知ることができるのは、のぞいている人に心の働きがあるからです。

それでパスカルは「宇宙は私を一つの点のように包

んでいるが、その宇宙は私を包んでいることを知らない。逆に小さな私は宇宙を知ることができる。いわば「私は宇宙を包む」とまで言います。月や太陽を「知る」ということは月や太陽を私が包んでいるようなものだというのですね。本当にそう思います。

要するに、物質的自然はどれほど広大であつても、己自身を知ることができない。しかるに心は物質的自然を知ることができる。物質的自然は物質的にはこの小さな私を包んでいるが、小さな私の心は物質的自然を知る、捉え、包むことができる。

身近に言えば、肉体は肉体であることを知らない。肉体を肉体と知るのは心の働きだということです。

では個人のこの心はどこから生まれてきたか。それは脳細胞(ニューロン活動)から生まれたいふのが現代の多くの脳科学者の意見ですが、はたしてそうなのでしょうか。それは分から

ないというのが実際ではありませんか。そういう広大で不思議な働きをする心が脳細胞から生まれると断定できるのでしょうか、できないと思います。分からないという方が正直だと思います。

大体脳を研究して、「心は脳から発生する」などと脳科学者はしばしば言いますが、そのように観察し思考していること自体がすでに心の働きに依存しています。脳科学者も心に依らなくては脳を研究(対象化)することは全くできません。

脳の中をいくら研究しても人の心の内容はほとんど分からないと思います。脳のニューロン(神経細胞)活動を観察して、「これはこういう現象だ」と科学者がいいますが、それこそそういう現象を(心で考えている)のですから。

ニューロン活動を観察して心の内容を理解しようとするのは、例えば交響曲の演奏会で指揮者の指揮棒を振るのだけを見て、その音

楽を理解しようとするようなものです。こういうことはベルグソン(二十世紀前半の最高の哲学者。一九四一年亡)がいつています。

物質と心とは質が違います。個物としての物質は物質から生まれますが、物質が心を産むことはできないのではないのでしょうか。心は心から生まれるのではないのでしょうか。個人の心は大きな心の働きに於て生じるのではないのでしょうか。

この世界は物質的な面と意識的な面の二面があるといわれ、物質的な面も無限無量でありましょう。この無限無量な心を分有して個人の心があるのではないのでしょうか。

そのことを西田幾多郎は大変難しい表現で論述していますが、その参考文章をごく少しですが後に出しておきます。

要するに物質的自然だけでは、物質的自然も分からない。もし物質的自然だけが実在なら物質的自然その

ものも無きも同然です。物質の働きを知る意識の働きがなければ物質的自然の存在そのものも永久に分らないでしようから。

物質と意識とは離れがたく一つでありながら矛盾したものであつて、同質ではないでしよう。だから物質からは意識は生まれえないし、生まれるのは同質のものからしか生まれえないではないでしようか。

また物質の現象は対象的に掴む(認識する)ことが可能ですが、認識する側の意識自身は意識では掴めません。知りつつある意識は対象化できないので、意識の働きをあたかも無いものの如くに考え、あるのは物質だけだと思ひやすいのです。

意識の領域は広くて深いのですが、一番近い自分の心さえ見えません。いわんや仏のお心は見えませぬ。仏の大悲のお心も私の心も意識界・精神界に属していませんから、これは樹木や山

や川のように物質的な対象として捉えることは当然で
きません。

しかも物質界よりもむしろ意識界の方が身近で直接的
です。

意識があるから世界があります。私があり、親子兄弟があり、人生があるのは、
心の働きがあるからです。

目の前に「木がある」「机がある」ということと「見る私がここにいる」ということは一つのこと、一つの事実です。私とは「知る」はたらし、知る当体です。しかし知る働きは知ることができないのです。目が目を見ることができないように、手が手自身を掴むことが出来ないように、舌は舌自身を味わうことができないように。

現代人は外なる物質的自
然しか認めようとしません。
それゆえアミダ仏とか浄土
とか仏の大悲心といっても
受け付けないのです。です
から仏法を聞こうとしない
のです。

アミダ仏の救いの働きと
か、仏心大悲の働きとか、
仏様とのであいか、真宗
ではよく申します。キリス
ト教でも神の愛によって救
われるとかいわれます。そ
ういう働きを物質界の中
に認めようとしても知れる
わけがありません。ですから
ともすると「神や仏はどこ
にある。どこにもないでは
ないか」というような非難
がしばしば起こるのです。

以上ややこしいことを申
しましたのは、物質的自然
の領域とともに意識の領域
があることを言いたいから
です。

意識の領域は非常に広い
のでしよう。私の心はその
広い領域の一分有に過ぎな
いのでしよう。この意識界
にアミダ仏の佛心は働いて
下さっているのではないで
しょうか。

この凡夫の心にアミダ仏
の大悲のお心が働いて下さ
り、その仏心大悲が私の
心に届くのです。アミダ仏
は大悲の心を南無阿弥陀仏

に現して下さいます。南無
阿弥陀仏の言葉となって喚
びかけて下さらなければ、
この大悲のお心が私どもの
心に働きかけて下さってい
ることが私たちには分かり
ません。

大悲のお心は見えませんが、南無阿弥陀仏の音声と
なって響いて下さる、いわ
ば露わになって下さること
によって、アミダ仏が見え
ない凡夫にもお念仏によつ
て、アミダ仏のお心に触れ
るのであります。

しかも南無阿弥陀仏のお
心に触れることによって、
物質面と精神面に分かれる
以前の實在（真如）にほの
かながらもふれるのです。

このアミダ仏の實在のい
のちに触れるところ、そこ
において私たちを生かして
くださっている力に触れる
のです。無量寿というはか
りなきいのちに触れるので
す。私を抱いていてくださ
り、私をここに置いていて
くださる基盤に触れるので
あります。摂取不捨の真理
（真実）にであり、摂取不
捨の利益に預かるのです。

ここに真宗の救いがありま
す。

*

【西田幾多郎の言葉】

一。「世界は、何処までも空
間的に、物質的である。世
界は時間的に、精神的であ
るのである。」（西田幾多郎
全集十一巻の三三八頁）

一。「物質的世界と精神的
世界との二つの世界があつ
て互いに相関係するのでは
ない。両者は一つの矛盾的
自己同一の世界の両面、す
なわち歴史的世界の表裏と
考うべきものであるのであ
る。

世界が自己に於て自己を
表現するという立場から言
えば、内と外とも言うべき
であろう。」（同上。十一の
三三八）

一。「我々の意識界は物体界
とその次元を異にしておる。
意識界が物体界の中に含ま
れるのではなく、意識界が
物体界をその対象として含
むのである。所謂物体界は
却つて主観的と考えること
もできるのである。」（同上。
三の一四六）

一。「物理学的真理も、我々

が色を見、聲を聞くからで
ある。而して見るもの、聞
くものは、眼とか耳とかと
いふ有機的器官ではなくし
て、心である。」（同上。十
一の三七二）

一。「我々の意識は之を分取
して居るのである。普通に
人は意識を自己に属するも
のと考へて居るが故に、斯
く云へば、直に世界を主観
的に考へると思ふのである。
私は意識的自己の立場から
世界を考へて居るのではな
い、我々の自己を世界に於
て考へて居るのである。」（同
上。十一の三五〇）（了）

〈遠方法話予定〉

○四月一日。名古屋。高畑会館。
午前十時。法話・座談。

○五月十五日。名古屋。高畑会館。
午前十時より。法話・座談。

○六月十七日午後より六月十九日
午後まで。福井別院

六月十九日。夜七時より「ここ
の講座」。福井別院

（詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）

恩徳広大釈迦如来

(和讃問答)

恩徳広大釈迦如来

韋提夫人に勅してぞ

光台現国のそのなかに

安楽世界をえらばしむ

(観経和讃)

現代語意識（大悲の恩徳の広大なる釈迦如来は安らかな世界に生まれたいと願うイダイケ夫人に対して、釈迦如来は放つ光明の中に諸仏の国土を現出されて、その中からアマミダ仏の浄土である安楽世界をイダイケに選ばせて、そこに往生したいと願わしめられた）

* * *

D 「このご和讃は観無量寿経の内容を宗祖が和讃にされたものです。最初の恩徳広大釈迦如来とは、観経を説かれた釈尊のお徳を讃えられた名です。釈尊が悟りを開かれて、一切衆生を救いたもうアマミダ仏のご本願を説かれた。そのことは、釈尊でなければ誰もなしえないことでありましよ

尊の頭の上に光のスクリーンのようになって、そこに無数の様々な仏の国のすがたが映し出されました。それを光台現国といわれるのです」

N 「安楽世界を選ばしむ」とは」

D 「そのような無数の諸仏の国土のすがたをイダイケは見つて、その中から（私はアマミダ仏の極楽世界に生まれたい）と願われたことをいいます。これ全体が釈尊の大悲からのご催促でありましよ」

N 「このご和讃から何を学べるのでしょうか」

D 「それはいろいろあります。その一つは、人間がイダイケのように人生に絶望した時、（もうこの世がいやになった死んでしまいたい）というような状況になるのではないのでしょうか。その時にどこに救われる道があるかという時、この観経に説かれている浄土往生の法に救いの道が説かれているといえましよ」

N 「イダイケは絶望的な状態の中で（私は苦しみのない世界に生まれたい）という願いを起こしましたね」

D 「ええ、そこに一つのポイントがあるでしよ。現代人が同じような状態に陥った時に、もしも安らかな世界に生まれたいという願いを起こしたなら、それは救いにいたる大事なきっかけになると思ひます。とにかく（死んでしまいたい）が（苦しみのない世界に生まれたい）という願ひにまで展開することですから。ということは（死んでしまいたい）は必ずしも（生まれたたい）にはならないからです」

N 「イダイケはなぜそういう願ひを起こしたのでしょうか」

D 「それは日頃釈尊の教えを聞いていたという点がありましよ」

N 「苦境に陥る前に仏教のお話を聞いていたという縁があったということですね」

D 「ええそうですね」

N 「（私はもう死んでしまいたい）という絶望的な状態に現代人も当然そうなる時があると思ひますが、そういう場合に、日頃、人生の光となるよな教えを聞いておき、善知識にお会いしてるといふことは大事なことですね」

D 「ええそうですね。お念仏

にもし縁のある人なら、南無阿弥陀仏に於て（阿弥陀の浄土に生まれようと願え、念佛申すばかりで浄土に連れて行く）とのアマミダ仏の大悲の誓いを聞くことになりましよ。

それを通して、私たちに現在ただ今、アマミダ仏にあわしていただける道が開かれてまいります」

N 「そうすると観経の教説は（絶望から歓喜へ）の法と言えそうですね」

D 「ええそうですね。ただ現代人がお念仏の教えに接する縁が薄いので、絶望からの脱却、あるいは絶望から歓喜への道は開かれにくいのですね」

N 「仏縁や宗教的な縁にあわない日本人は普通、大自然に帰るのだということと終わって行くのかもしれない。あるいはこの世はそこそこ楽しかったという風で終わって行くのかもしれない」

D 「普通はそうなのでしよね。絶望もしなかつたけれども、真実にもあえなかつたということですね。それは人生を不完全燃焼で終わらせているといえないでしよか」

(了)